

《闘争する人格》と大学問題 (1)

——『職業としての学問』をいかに読むか——

野 崎 敏 郎

〔抄 録〕

ヴェーバーの『職業としての学問』は、1919 年頃のドイツの大学問題にいかに取りくむかという焦眉の実践的課題に即した著作である。本稿では、フライブルク大学招聘問題とハイデルベルク大学招聘問題におけるヴェーバーの体験を検証し、また十九～二十世紀ドイツの哲学部再編問題に即して、学問観をめぐる対立の深化や専門化・閉塞化の加速などを明らかにする。そして、科学(者)の存在そのものの危機に抗し、高等教育体制と文部官僚制の刷新をめざす闘争の自由を彼が求めていたことをしめす。また、この講演録の特殊な成立事情から、つねに入念な考証のうえでこのテキストを読まなくてはならないことを指摘する。

キーワード：マックス・ヴェーバー、『職業としての学問』、ドイツの大学問題、アルトホフ

は じ め に

拙著『ヴェーバー『職業としての学問』の研究(完全版)』(晃洋書房、2016 年刊、以下文中では《完全版》と略記)は、大学におけるヴェーバーの闘争を中心に据え、彼の歩みと思考とを跡づけ、講演録『職業としての学問』の付帯状況・周辺事情を精査し、彼の学問論・科学論・教育論の実相とその射程とを明示した著作である。この講演録は、従来まったく理解されず、誤読・曲解に塗れてきたので、拙著においては、なによりもまずこの講演録の正確な読解を提示することに努めた。その結果、大学問題にたいするヴェーバーの視座や、この講演録のもつ今日的意義については、ごく限定された範囲内でのみ、そこそこで示唆するにとどめた。

《大学とヴェーバー》という重要な考究課題は、ヤスパース・シルズ・上山安敏・潮木守一・早島英らの先駆的研究によって掘りさげられたものの、この五人を除くと、日本においても他国においても、従来不当に軽視されてきた。また、1917～1919 年当時の時代背景のもと

で、大学におけるヴェーバーの闘争がどのような主観的意味と客観的意義を有していたのかが理解されていなかった。さらに、われわれ後世の者が、このヴェーバーの闘争にたいしてどのような価値査定を与え、今日それをどのように活かすことが可能なか——また活かすべきなのか——についても、長年にわたって等閑視されたままであった。そこで、これらの諸問題を吟味し、彼の大学論の意義を明示することが、本稿の主たる課題となる。

彼がこの講演録において取りあつかっているのは、大学制度の問題、大学行政の問題、大学内部運営の問題、高等教育の問題、大学の変容の問題、科学研究体制の問題、学会のありかたにかかわる問題、知の官僚制化の問題、科学者をとりまく不条理性の問題、科学の俗流化の問題、大学人の腐敗と似非学者の跳梁の問題、科学のもたらす害悪と科学者の社会的責任にかかわる問題、科学者の人格と知的誠実性の問題等々である（本稿では、これらの問題群を一括して広義の「大学問題」と称する）。ところが、——いちいち列挙しないが——この講演録の従来の読者の大半は、彼の立論がたえずこうした大学問題と関連づけられていることをみようとして、大学をめぐる焦眉の実践的課題を等閑視したまま、この講演録中のあれこれの言句をもてあそんできたという感がある。そこで、本稿においては、彼の立論を、当時の大学をめぐる問題群と関連づけながら、『職業としての学問』の段落①から段落④⑩までの全体の射程と論旨と彼の真意とを浮きたたせる作業をすすめ、また、『書かれざる段落④⑪』がどのようなものであるのか、われわれ後世の大学人はこの講演録から——また大学人ヴェーバーから——なにを学ぶべきかという重要な問題にも（ごく限定された範囲内ではあるが）言及したい。

第二帝政期ドイツの大学の問題状況を知らず、それにたいして闘う大学人ヴェーバーの生きた姿を理解しない者は、けっしてこの講演録を読解できない。これまでの誤読はこの事情によるところがもっとも大きいので、本稿は、第一に、ドイツの大学問題とヴェーバーの——大学のなかおよび生の現場における——諸活動との結びつきを明示し、ヴェーバー大学論のエッセンスを撰取すること、第二に、この講演録全体を整合的に読解すること、第三に、この講演録を、ヴェーバーの学的営為およびその生涯の総体のなかに位置づけること、第四に、今日、われわれ自身が日本社会と日本の大学にかかわる諸問題に取りくむなかで、『職業としての学問』の《初獲得》ないし《再獲得》の意義を確認すること——この四つを目標とする。

I 『職業としての学問』読解に不可欠の前提としてのドイツの大学問題（素描）

フライブルク大学・ハイデルベルク大学招聘問題

2004年春、ハイデルベルク大学でヴェーバーの協力者であったカール・ラートゲン（1856～1921）がこの大学に招聘されたときの記録を筆者が調べていたところ、同じファイルのなかに、ヴェーバーの招聘記録も綴じこまれていることに気づいた（GLA 235/3140）。ラートゲンの招聘事情についても、このときの調査とその後の追加調査とによって、重要な新事実が

次々に判明したのだが⁽¹⁾、並行して、ヴェーバーがこの大学に招聘されたときにも、それまで想像されていたとはかけはなれた複雑な諸事情が決定的な要因になっていたことを突きとめた(野崎敏郎 2011: 第 2 章)。また、ヴェーバーのフライブルク大学への招聘事情も調査し、この人事をめぐる謎も解明した(前掲書: 18~37 頁)。その結果、フライブルク大学招聘人事(1893~94 年)とハイデルベルク大学招聘人事(1896~97 年)が、彼にとって、本格的にドイツの大学問題に目を向ける重要な機会であったことが判明した。

フライブルク大学招聘人事にあつては、プロイセンの文部官僚(アルトホフ)とバーデンの文部官僚(アルンスペルガー)との確執を背景として、対抗しあう(他国の)文部行政担当省のあいだの緊張関係が、若手研究者(ヴェーバー)の引き抜きにさいして、一年余にわたって異常な紛糾を招来した。そこでは、意図的にデマが流され(前掲書: 24~25 頁)、また複数の人事計画にかんする文部官僚の思惑が、招聘されようとしている当事者を翻弄していた(前掲書: 26~29 頁)。ここには、ドイツの文部官僚制の内包する諸矛盾が顕現していたのである。

ハイデルベルク大学招聘人事にあつては、後年ヴェーバー自身が「いくらか複雑な諸事情(etwas komplizierte Verhältnisse)」「さらに困難な諸事情(weit schwierigere [Verhältnisse])」等々と語った問題が生じていた(MWzG: 14)。それは、彼が招かれようとしているそのポストが、ハイデルベルク大学哲学部における重要な戦略的意義を有していたことと絡んでいる。1864~65 年頃、この大学では、哲学部内に置かれている国家学・官房学部門を、南ドイツの諸大学のような国家経済学部として独立させるのではなく、この部門を拡充して法学部内に置き、法学・国家学部を創設することが検討されていた(野崎敏郎 2011: 86~87 頁)。そこで、その準備として、1865 年に教授ポストが増設され、カール・クニースが招聘された。一部で誤認されているが⁽²⁾、クニースは、カール・ハインリヒ・ラウの後任ではない。国民経済学・財政学第一教授であるラウは、1870 年に亡くなるまでハイデルベルク大学を退職しておらず、クニースは、第二教授として招聘され、1865 年から 1870 年まで、ハイデルベルク大学哲学部は二人の経済学教授を擁していた。ところが、肝心の国家学部門の法学部への移管は実現しなかった。そのため、1870 年にラウが亡くなったとき、後任は補充されず、経済学教授はクニースひとりだけになったのである。

1872 年に、カールスルーエにあった農業専門校が廃止され、その農学教授だったアードルフ・シュテンゲルがハイデルベルク大学哲学部に移籍し、国家学・官房学部門の授業を担当する。また、法学部の国法学・国際法教授であるヨハン・カスパル・ブルンチュリ(のちアウグスト・フォン・ブルメリンク、さらにゲオルク・イェリネクに交代)が、クニースと共同で国家学ゼミナールを運営する。しかし、1890 年に自然科学・数学部が開設されると、シュテンゲルはこの新学部に移るので、以後、哲学部国家学・官房学部門は、ゼミナール運営を半分法学部教授に預け、講義科目のかなりの部分を法学部および自然科学・数学部から借りるという変則的なかたちで、毎学期やりくりを強いられることになる。十九世紀後半において、ドイツ

の経済発展にともなう、ドイツ各大学の経済学関連領域はその重要性を増し、受講希望学生も増えていくが、ハイデルベルク大学でクニースと員外准教授と私講師が展開している授業が、そうした教育ニーズに十分応えるものになっていたとは考えにくい。1897年春にヴェーバーがハイデルベルクに着任したとき、この部門は、改革拡充が求められていたのである。

この事情は、とりわけ、自分の後任人事にたいするクニースの策動を理解するために重要である。クニースは、1896年8月11日付バーデン政府宛書簡において、グスタフ・フォン・シェーンベルクをつよく推している（野崎敏郎 2011: 47～49 頁）。しかし、イエリネクらは、同年11月2日付推薦書において、クニース提案を退け、クナッパ、ビューヒャー、ヴェーバーを推薦し、しかも、第3位のヴェーバーの重要性を特筆している（前掲書: 52～55 頁）。イエリネクらの法学部教授たちと、哲学部のクニース以外の教授たちが、クニースの後任人事にさいしてクニースの意向を無視していることが明らかである。

この紛糾は、1864～65年頃からずっとくすぶっている——また1890年の自然科学・数学部開設にともなう——ハイデルベルク大学の改組問題と係わっている。この当時の状況のままでは、借り物で切りまわされている国家学・官房学部門の存立自体が疑問視されざるをえず、また他大学との競争を考慮に入れると、この部門の拡充に取りくむことが重要課題であり、そのためには、クニースでもシェーンベルクでもなく、社会政策の新しい潮流をこそこのポストに引き入れる必要があるというのが、哲学部・法学部教授たちの意向であり、彼らは、こうした配慮から、当のクニースの抵抗を斥け、いくらか強引に人事をすすめているのである。

このように、ヴェーバーは、ハイデルベルク大学の組織的改組改編、また国家学・官房学部門のカリキュラムの刷新という重要な任務を帯びて着任する。ほどなく彼を襲う精神神経疾患のため、その任務が十全に果たされることは困難になるのだが、フライブルクからハイデルベルクへの移籍体験を通じて、彼が、科学と教学体制と科学教育とにかかわる諸問題の総体へと目を向けていったことはまちがいない。

十九～二十世紀ドイツの大学改組問題（1）哲学部の再編

彼が体験したフライブルク大学とハイデルベルク大学にまつわる問題群は、この二つの大学のみならず、十九世紀におけるドイツの大学の変容と深く係わっている。とくに学部再編の課題は、自然科学と文化科学との再定義の問題と不可分である。すでに1890年に自然科学・数学部が独立したため、ハイデルベルク大学哲学部は自然科学系の諸部門を失い、残る部門（文化科学部門）をどう再定義するのが喫緊の課題になっていた。この事態は、世紀転換期ドイツの他の大学が直面していたことでもある。

神学部・法学部・医学部・哲学部という古典的な四学部構成においては、もともと、職業人養成系三学部の予備教育を哲学部がなすという関係が成りたっていた。しかし、十八世紀後半になると、大学予備教育を担当するギムナジウムの整備・発展にともなう、哲学部は、三

学部にたいする基礎教育を提供するとともに、三学部の学問体系を哲学部の諸部門が基礎づけるという関係へと変化した(別府昭郎 1975 b: 77 頁)。しかし、こうした哲学部を要とする体制は長くは続かなかった。それは、まさにその哲学部の拡充と深く係わっている。十九世紀には、自然科学の諸領域がめざましく発展し、哲学部および医学部における自然科学系諸部門の拡充が図られていく。また国家学・官房学(とりわけ財政学)の補助学として、数学が重視されるようになる。その結果、哲学部の諸部門が拡張され、他学部にくらべて、教員数・開講科目数が肥大化するのである。

ところが、こうした肥大化は哲学部の危機をも招く。そのことを如実にしめすのがテュービンゲン大学の紛糾事例である。1859 年に、ヴェルテンベルク政府が、この大学に化学の第二正教授ポストを増設することを提案したとき、第一正教授ポストを有する医学部は、自然科学系の新学部を設置することを求める。それは、第一に、医学部内に医学以外の領域の講座が増加するのは好ましくないからであり、第二に、自然科学の諸領域が、哲学部と医学部との二学部に分割されている現状を問題視したからである。これにたいして、哲学部内では、医学部の要求に同調する者、化学教授ポストを哲学部に置くよう求める者など、意見が一致しなかった。大学評議会では、新設ポストを哲学部に置くことが可決され、その旨政府に伝えられる。ところが 1862 年になると、政府は医学部提案を支持するようになり、再審議と投票の末、15 対 13 の僅差で新学部の設置が決定される(Engelhardt u. Decker-Hauff 1963: 30-44, 115-119, 149, 別府昭郎 1975 a: 12~13 頁)。

この紛糾にさいして、君主と革新官僚による「上からの改革」と、これにたいする哲学部の抵抗とがみられ、また医学・自然科学系の教授たちと哲学部多数派の教授たちとのあいだの学問観をめぐる対立が顕在化した。さらに、哲学部に所属していた自然科学系教授たちが新学部に移籍するのにともない、当然、哲学部の講座数、哲学部を代表する評議員数、哲学部で学ぶ学生の数が大幅に減ることが予想されたため、この学部の利害にもとづく抵抗も大きかった(別府昭郎 1975 a: 14~15 頁)。この《産みの苦しみ》を経て、テュービンゲン大学内には大きなしこりが遺ったにちがいない。別府昭郎は、この事例にみられるような哲学部の分裂が、自然科学と文化科学という「両学問領域から相互接触・相互作用を必要以上に奪い去り、『諸学の全体性』への志向を見失ない、学問の専門主義化への道を開いたことは否定できない」と評し、この哲学部改組問題が、「諸学問の個別化・実証化・専門化の傾向にさらに拍車を加えた」と指摘している(前掲書: 19 頁, 別府昭郎 1975 b: 85 頁)。十九世紀における学部改組は、各学問領域の専門化・閉塞化を加速する作用を及ぼしたのである。

十九世紀中に四学部から脱した大学は、ハイデルベルク大学を含めて、とくに西南ドイツに多く存在していた。五学部(神学部、法学・国家学部、医学部、哲学部、数学・自然科学部)構成のシュトラースブルク大学に在籍するヴィルヘルム・ヴィンデルバントにとって、また、四学部を維持しながら、哲学部が言語・歴史学科と数学・自然科学科とに事実上分裂していく

フライブルク大学に在籍するハインリヒ・リッケルトにとって、自然科学と文化科学との再定義は、みずからの所属学部のレーゾン・デートルにかかわる重要課題であった。そしてその事情は、後年この二人と同僚になる⁽³⁾ヴェーバーにとってもまた同様であった。ヴェーバーは、この二人から学びつつ、〈自然科学と文化科学との方法論〉〈科学と科学研究と科学教育との関連づけ〉〈研究と教授の自由〉〈健全な学生教育と学術後継者養成〉〈市民生活と大学生活との結合〉〈研究者の社会的実践〉といった諸問題・諸課題を掘りさげていく。その営みは、テュービンゲン大学やハイデルベルク大学における改組問題と、それにまわりついていた学問観ないし科学観の対立の問題と係わっており、いわば十九世紀における大学改組の二十世紀における《後始末》という性格を有していた。

十九～二十世紀ドイツの大学改組問題 (2) 経済学系諸部門の整備

ヴェーバーの活動を理解するためにもうひとつ重要なのは、各大学の経済学系諸部門の興隆である。十八世紀後半以降、ドイツの大学に官房学・国家経済学のための組織体が形成されていくが、それは、既存の大学組織とは別に設置されるか、哲学部と法学部とのいわば隙間に置かれるかであり、また一般に法科万能の傾向が強く、法学者が官房学を軽んじていたため、なかなか大学内に確固たる地位を占めるにはいたらなかった(別府昭郎 1977: 2~4 頁)。官房学研究所が伝統的の四学部と併置される第五の学部として認知されるのは、インゴルシュタット大学の 1799 年の改革が最初らしい(前掲書: 5 頁)。その後ランツフートに移転した同大学の官房学科目は、農林・鉱山学、財政学など、行政実務に直接関連する科目と、それを基礎づける補助科目とで構成されている。それは、官房学自体が独自の学問的展開を果たしたもののいうよりも、むしろ権力側の要請による編成という性格が強いことを反映している。これは、専門的知識をもつ有能な行政官僚を養成するための機関なのである(前掲書: 9~12 頁)。この部門は、大学の他の学部・部門以上に国家との結びつきが強く、十九世紀におけるその発展も、一方では、国家から要請される官僚養成の課題によって、他方では、ドイツの商工業の発展を支えるというもうひとつの課題によって、条件づけられていたのである。

ハイデルベルク大学哲学部国家学・官房学部門もまた刷新を求められており、ヴェーバーは、これに応えるかたちで、1898 年 11 月には、国民経済学教授ポストを増設することを政府に提案している(野崎敏郎 2011: 107~108 頁)。しかしバーデン政府は、むしろマンハイム市からの要請を受け、マンハイム財界とハイデルベルク大学との産学協同の足がかりとして、国民経済学第二教授ポストを設けることにしたと思われる(前掲書: 111~112 頁)。ここでもまた、教学的要請ではなく、国家や財界の意向のほうが優先されるのであり、ヴェーバーは、こうした動向を警戒していた。

また、バーデン政府は、国民経済学教授人事にたいして積極的に介入している。1900 年 2 月 24 日付ハイデルベルク大学宛布達(の草稿)のなかで、アルンスベルガーは、休職するヴ

ヴェーバーの任務代行のために第二教授ポストを設けることを確言するとともに、招聘すべき人材について、学会で確固たる地位を占めている有力者のみならず、有能な若手にも目を配るよう促し、場合によっては正教授ではなく員内准教授として招聘することも可としており、哲学部が政府に提出する推薦リストの体裁についても示唆を与えている（前掲書：137～141頁）。学部は、政府にたいして教授候補を推薦する権利を有しているとはいえ、もともと、この推薦にたいして、政府側はなんら拘束されることはないのだが、さらに政府は、その推薦書の内容にたいしてもあれこれと注文をつけるにいたっているのである。

これにたいして哲学部が提出した推薦書は、実質的にヴェーバーが作成したと思われる。そこにおいては、アルンスペルガーの提案が顧慮されつつも、この人事では、員内准教授ではなく正教授として招聘することが望ましいとされ、四名の候補者が推薦されている（前掲書：142～145頁）。

こうした人事案件をはじめとして、ヴェーバーとバーデン政府とのあいだには、長期にわたって緊張関係があるのだが、従来それは研究者の視野に入っていなかったと思われる⁽⁴⁾。大学問題にかんする彼の発言を読むとき、そこに国家機関との対峙を読みとることは、ヴェーバー理解にとって決定的に重要なことである。

ツィーグラの専門主義批判とヴェーバー

フライブルク時代・ハイデルベルク時代のヴェーバーの眼前にあったのは、大学再編問題を抱え、また国家との結びつきのなかで、伝統的な大学の姿を変えるか、それとも現状維持の途を探るかをめぐって、ドイツの大学が直面していた困難である。そしてその困難の只中に置かれている教授たちは、あるいは学問諸領域の総体性（ないし相互裨益性）を見失い、あるいは増大する教育任務を私講師に転嫁し、あるいはみずからの縄張りを確保することにのみ汲々としていた。テオバルト・ツィーグラ⁽⁵⁾は、こうした混迷のなかですすんだ「学術的専門主義（ein gelehrtes Spezialistentum）」の有様を鋭く剔っている。十九世紀末～二十世紀初頭になると、主知主義にたいする信仰はますます衰え、「至福をもたらす唯一の教養過程である大学の教養過程にたいする信仰は消滅した。これにたいして出現したのは、学術的専門主義の繁茂であり、これは、細目研究（Einzelheiten）に耽り、〔学術研究〕全体にたいするみずからの意義がもはや自分ではわからなくなり、それゆえみずからの意義を過大評価する為体であった」（Ziegler 1911：622）。

ツィーグラは、かかる学術的専門主義の跋扈を、教育制度の改革や、各領域の専門学者たちの動静と関連づけるとともに、「科学もまたそのあらゆる営みにおいてその属する時代の子であることが判明する」と述べ、ドイツの商工業の成功と科学者たちの活動との関連を説き、工学（工業技術）がドイツの科学のもっとも主要な推進力となっていることを指摘する。そして、こうした科学の重要性を理解し、プロイセンにおける種々の科学的事業の促進のために尽

力したのが、プロイセン文部省の高等教育・科学・医学担当局長であったアルトホフであることを、ツィーグラーは特筆している (ebd.: 631 f.)。しかし、かかる体制にあっては、はたして研究成果が価値あるものを生みだしうるか、また、「かかる科学的大事業体に勤務する非凡ならざる共同研究者たちが、隅々まで分業化がなされているところにおいて、一般的教養を欠いた精神的『手足』へとますます堕落 (herabsinken) していかないかどうか」は疑わしい (ebd.: 632)。このように、ツィーグラーは、十九～二十世紀の主要な思潮、それにたいする対抗思想の勃興、これらに影響された学術研究活動全般における専門主義的傾向の深化、科学研究への国家の介入、文教体制における官僚制化の浸透等々にたいして周到に目配りし、ドイツの大学問題を、こうした問題群と関連づけている。

ヴェーバーによる「専門化 (Spezialisierung)」批判は、直接にはヘルムホルツやトルストイらによるそれを踏まえたものであるが (野崎敏郎 2016: 83～85 頁)、専門化 (= 知の官僚制化) は、科学・科学者・科学研究活動内部の問題であるとともに、それを成り立たせている学術体制・教学体制の問題でもあり、しかもそれは、十九～二十世紀ドイツの思潮 (の揺れ動き)、経済変動、政治的動向とも密接に絡みあっている。この専門化の問題をはじめとするドイツの大学問題を、そうした複合的事象として把握する視座は、ヴェーバーがツィーグラーから学んだものであろう。とくに、ヴェーバーは、官僚制機関において、その機関の長よりも、専門的な修練を積んだ専門官吏のほうが実権を掌握しているのが通例であることを指摘し、そのさい、文部大臣を手玉にとってみずからの意向を貫徹させた豪腕の持ち主である⁽⁶⁾局長アルトホフの名をわざわざ挙げている (MWGI/17: 182)。『職業としての政治』のなかのこの発言は、ツィーグラーのアルトホフ評を念頭に置いていると思われる。

ヴェーバーは、その大学人としての歩みのなかで、ドイツの大学問題に真正面から取りくみ、その現状打破・改革へと向かうのだが、それは、方向性を見失っている教授たちや、拠りどころをなくしている学生たちの姿といった大学内のそこここに見える現象をたんに表層的に批評するという性格のものではない。むしろ、伝統的な大学の姿が変貌を余儀なくされ、古典的な学問観や古典的な学部構成が通用しなくなり、それにたいする十九世紀の諸改革もまた有効でないことが明らかになった以上、教育課程・教育内容・教育手法のそれぞれをどう刷新し、またそれを学問体系とどう関連づけるのか、また、大学組織および高等教育体制の改革の方向はどのようにあるべきか、大学と文部官僚制とはどのような関係にあるべきかといった多岐にわたる論点を、彼は呈示しているのである。

アルトホフ評価とアルトホフ体制からの脱却

大学問題をめぐるヴェーバーの取り組みとしてよく知られているのは、アルトホフ体制にたいする闘争である。しかしここで注意すべきは、アルトホフにたいするヴェーバーの評価が単純ではないという点である。ヴェーバーは、アルトホフ個人の力量と、アルトホフの築いた体

制とを区別し、それぞれにたいして冷徹な評価を与えているのである⁽⁷⁾。

フライブルク大学招聘をめぐるアルトホフとヴェーバーとのあいだの悶着についてはすでに解明した(野崎敏郎 2011: 18~37 頁)。この体験からヴェーバーが得た教訓は、ドイツ各支邦の文部行政担当省とどのような関係を築くかである。ヴェーバーは、『職業としての学問』のなかで、教授候補を政府に推薦する学部と、その推薦を参考にしながら教授を任命する文部行政担当省とのあいだに「協働の法則」が働いていることを指摘し(野崎敏郎 2016: 42 頁)、またこここで大学教授の腐敗ぶりを示唆している。そのさい彼は、ただ個々の教授たちや官僚たちの行状をあげつらい罵っているのではなく、各学部の教授たちや省の官僚たちが、主観的には善意をもって人事案件に当たっているにもかかわらず、「僥倖 (der Hazard)」の支配を招いてしまうのはなぜかを問題にしている。彼は、ここにおいて、政府機関と高等教育機関のなかに官僚制が深く浸透し、とくに大学教員の階層制が確立されたこと、また、まさにその官僚制化の結果として、僥倖の支配が現出することを見抜いている。したがって、大学をめぐるヴェーバーの闘争は、関係者個人を非難する営みであるよりは、むしろ高等教育体制と文部官僚制をめぐる闘争であり、『知の官僚制化』そのものにたいする闘争である。

あらためていうまでもなく、これは、ヴェーバー個人の闘争として完結する性格のものではなく、ドイツの大学人全体を巻きこんだ長期にわたる闘争でなくてはならない。そこで彼は、1908 年 9 月の第二回ドイツ大学教員会議に、弟アルフレートとともに入念に準備して臨み、アーロンス事件とミヒェルス問題を取りあげ、党派性によって私講師の権利を剥奪されたり教授資格授与が拒否されたりすることがないように求めている(野崎敏郎 2016: 8~9 頁)。彼はその後もドイツ大学教員会議で論陣を張っており、そこにおける発言・報告、またそこにおける議論を踏まえて公にした雑誌論説は、『職業としての学問』の原型を形づくっている(前掲書: 330~332 頁)。

ヴェーバーと C・H・ベッカー

大学問題にかかわるヴェーバーの活動にたいしては、当時はどちらかというと冷ややかな反応が目立っていたが、大学問題をめぐる彼の闘争は、けっして孤独なものでなかった。カール・ハインリヒ・ベッカーの活動がその証左である。ヴァイマル期において、ベッカーは、戦後ドイツにおける国民精神の再生・再建に向けた高等教育の課題を重視し、とりわけドイツの大学に根強い教員間の階層的格差構造を解消させようとしている。ベッカーの大学改革への取り組みは重要な考究課題だが、ここでは立ちいらず、1919 年におけるベッカーとヴェーバーとの交流をみておく。

ベッカーは、1902 年から 1908 年までハイデルベルク大学に勤務し(つまりヴェーバーの同僚であり)、そのイスラム研究は、ヴェーバーのイスラム理解や封建制研究に影響を与えた⁽⁸⁾。1908 年にラートゲンの慈漁でハンプルク拓植研究学院に移籍するが、学問の自由と高

等教育機関の自主性とにたいするハンプルク市当局およびハンプルク財界の無理解に辟易して⁽⁹⁾、1913年にボン大学に移り、1916年にはベルリン大学に移る。そして同年プロイセン文部省の高等教育担当官に抜擢され、後に文部大臣として辣腕を振るう⁽¹⁰⁾。

ベッカーは、1919年2月に、ヴェーバーをボン大学に招こうと企てる。2月6日付でヴェーバーに送られた書簡中で、ベッカーは、ケルン商科大学の改組によるケルン大学の設立について、それは「厚顔無恥な地域エゴイズム」にもとづくものだとする。ケルン大学が設立されると、その近隣にあるボン大学の存在価値が損なわれてしまうため、ベッカーはボン大学へのテコ入れを図る意向である。つまり、ボン大学法学部を法学・国家学部へと改編し、これにともなって、空いている国法学教授ポストを国家学・政治学ポストに変更し、そこにヴェーバーを迎えたいとしている。また講義義務時間数も講義内容もヴェーバーの希望通りで、講義を社会学系に改変することも可能であるとしている (GStAPK/CHB Rep. 92 W 4952: 4 f.)。

早島瑛の優れた研究によると、ケルン市長であり、ケルン商科大学理事長でもあるコンラート・アーデナウアーは、経済人養成機関である商科大学を、学位審査権を有する存在へと昇格させようと企て、ライン・ブルジョアジーの支持のもと、各党派に根回しを図り、ケルン大学の設立に向かっていく。これにたいして、ベッカーは、むしろケルン商科大学をボン大学に統合し、「商学・社会科学部」を設置する構想を対置する (早島瑛 1987: 363～365 頁)。それは、「ブルジョアジーの知識社会への参入要求」を満たそうとする動きにたいして、ベッカーが既存の大学の知の水準を維持することを優先させた事態だと特徴づけられる。そしてベッカーへの返書において、ヴェーバーは、ケルン大学構想にたいして明確に否定的である (前掲書: 359～360 頁)。これは、ブルジョアジーの利害によって大学のありかたが左右されることにたいするヴェーバーの警戒心をしめしたものであろう。

ドイツの大学の「自由」をめぐる

では、ドイツの既存の大学のありかたを、ヴェーバーが容認し擁護したのかというと、もちろんそうではない。そのことは、新聞論説「ドイツの大学におけるいわゆる『教職の自由』」(1908年9月20日, Dreijmanis 2010/12: 73-77) および雑誌論説「大学の教職の自由」(1909年1月, ebd.: 78-84) にあざやかにしめされている。この二つの論説は、『職業としての学問』の直接の原型である。この二つの論説と『職業としての学問』とを並べて読むと、ドイツの大学と大学教授たちにたいして、またドイツの大学行政にたいして、ヴェーバーが鋭い問題提起をなし、ドイツの大学における自由の確立を求めていることを看取できる。それは、ツィーグラが「一般的教養を欠いた精神的『手足』」への堕落を危惧したように、専門化状況が、また大学の官僚制化が、科学者の存在そのものの危機をもたらしていることを見据え、その状況に抗して闘うための自由である。

かつてヘルムホルツは、ドイツにおいて大学生が享受する自由と、教員が享受する教授の自

由とを礼賛し、自由に耐え、自由のなかで自己責任を貫徹できる精神のみが、真に国家と国民の負託に応える人材を養成するための条件だと主張した(野崎敏郎 2016: 79 頁)。これにたいして、ヴェーバーは、そもそもドイツの大学に「教職の自由」という名に値するものはないと主張し、ドイツにおける「学問の自由」は、政治的・宗派的参内資格の範囲内にしか存立していないと断ずる(Dreijmanis 2010/12: 74, 77)。しかも、既述のように、経済学領域が、もともと国家的要請につねに左右されてきており、また帝政期ドイツの各支邦が経済学領域を重視しているため、まさにその経済学領域において、ドイツの大学の「自由」の問題性が顕在化している。たとえばゾンバルト問題がそれである(野崎敏郎 2016: 41 頁)。

ヴェーバーが学問の自由を重視しているのは、あるべき大学像・学者像と係わっている。彼は、その教授就任講演を公刊するとき、これを公にすることに決めたのは、自分の主張が人々の賛同を得たからではなく、逆に不興を買ったからだと言明している(MWGI/4: 543)。彼の見地からすると、人々が——とりわけ国家権力に与っている人々が——目を向けたがらない不都合な事実をあえて指摘することが、学問に従事する者の責務なのである。これにたいして、ベルンハルトやシュパーンにたいしてヴェーバーがとっている態度からも明らかなように(野崎敏郎 2016: 45 頁)、権力におもねる御用学問・御用学者が幅を利かせると、それはかえって国家を危うくするというのが彼の判断である。ヴェーバーにおける自由主義とナショナリズムとの結合の一端が、こうした事案に表れている。

なお、研究・教育の自由や国家権力の問題にかんして扱ったヴェーバーの論稿が、1908 年以降に集中していることには理由がある。アルトホフが前年秋に引退し、この 1908 年に死去しており、このアカデミー・カリスマがいなくなると、プロイセンの文部行政官はさっそくベルンハルト事件を起こし、大学人事への無分別な介入をすすめていく。ヴェーバーは、こうしたアルトホフ以後のアルトホフ体制(アルトホフなきアルトホフ体制)の問題性をみている。アルトホフは、たしかにその手腕によって、科学の興隆への道を切りひらいた。しかし反面、そのつくりあげた体制は、国家による科学研究や教育現場への積極的介入の深化をも招いた。だから、これに抗して大学人がいかにみずからの教育・研究スタンスを固め、いかにして学問の府として大学の教育・研究水準を確保し、いかにして学生を鍛えるのかという課題を、ヴェーバーは見据えているのである。

同時期に、ヴェーバーは、シュモラーの「非党派性」に対峙しつつ、価値判断論争を展開していた。すでに拙著中で立ちいって論じたので、ここでは詳細を省くが、そこにおいて展開された論旨は『職業としての学問』に盛られている。価値判断論争は、大学という場における闘争と連動しており、ヴェーバーの社会科学論は、大学における価値自由な討議の確保という課題へと繋がっていくのである(野崎敏郎 2011: 244~245 頁)。

大学人ヴェーバーの活動と『職業としての学問』を理解するために

以上にみてきたように、大学問題にたいするヴェーバーの取り組みは、彼の研究・著述活動と不可分に結びついている。また、それは当然にも彼の教育活動とも結びついている。ところが、従来、彼の著作と彼の大学問題にかかわる諸活動とは、かならずしも結びつけて理解されていなかった⁽¹¹⁾。それは、ひとつには、研究者の多くが、ヴェーバーの事績にかんして、マリアンネ・ヴェーバーによる伝記に安直に凭りかかって済ませてきたからである。マリアンネは大学事情に疎く、彼女の記述には、無知に起因する多くの誤りがある。また、その訂正を試みた安藤英治の調査結果にも多くの不備がある⁽¹²⁾。そのため、ヴェーバーの著作が、大学問題の文脈から切りはなされて「紹介」され、「読解」されてきた。そしてその結果、研究者たちは、『職業としての学問』の正確な読解に到達しえなかったのである。

いまひとつ重要なのは、ヴェーバーによるこの講演の意図と、それが語られ、また出版されるさいの特殊な経緯と、彼がこの講演録に特殊な形態を与えたことが、まったく知られていないままだったことである。この経緯は拙著中で詳細に解明したが（野崎敏郎 2016：第Ⅱ部・研究編）、この事情から、刊行当時のドイツ人やヴェーバーの友人たちでさえ、この講演録を理解できなかった。しかも、カーラーによって『職業としての学問』にたいする最初の本格的な批判が公刊される直前にヴェーバーが没したため、この講演録の誤読にたいして、ヴェーバー自身が反論する機会がなかった。こうして、『職業としての学問』は、その語られ書かれた歴史的境位に正しく置かれたうえで読解されることが、ドイツにあっても他国にあっても、これまでなかったのである。

この講演録は、学術論文でもなく、大学の講義録でもなく、学生にたいする啓蒙的著作とも言いがたいものであり、むしろどちらかというと政治論説に近い。講演会場が大学ではなく街の書店ホールであったことにも十分注意を払わなくてはならない（図 1）。この講演（この著作）自体が、学問・教育の世界と生の現場との結節点に位置しているものであり（前掲書：219～220 頁）、そのため、この著作中で教壇禁欲は実行されていない。この出版物は、その特殊な性格に即して読まなくてはならない（前掲書：383～385, 393～398 頁）。しかし、そういう厳密な読解がなされたケースは、管見のかぎりでは皆無である。

また、1919 年夏に刊行された講演録は、1917 年 11 月 7 日に語られた内容そのままではない。ヴェーバーは、この日の講演の速記録に「尋常でないほどの増補と改訂を加えた」のであり（前掲書：423 頁）、しかも、1918～19 年におけるドイツほか各国の革命運動期にいたっても改訂が加えられた形跡がある（前掲書：50～52 頁）。シュルFTER は、再講演（二回目の講演）がなかったかのような詭弁を弄しており（前掲書：340 頁）、そのためもあって、1917 年の講演と、1919 年の再講演および刊行物とのあいだの差異が看過されがちであった。しかし、ヴェーバーは、1917 年 11 月から 1919 年 1 月 27 日の再講演までのあいだ、入念に増補・改訂を加えたのであり、その「増補と改訂」は、ビルンバウムが「尋常でない（außerordent-

lich)」と評していることから（前掲書：402 頁）、たとえばヴェーバーが『法社会学』草稿に加えたような激しいものだったと推察される（図 2）。

『職業としての学問』は、極度に内密（intim）な講演録であり、ほとんど内輪話のような内容も含まれており、講演者ヴェーバー自身にかかわる諸事情——そのなかにはきわめて私的な諸事情も含まれている——を知らないと、最低限の読解すらできない。筆者自身、近年公刊された書簡や、他の文献調査や、公文書館における第一次史料の発掘によって、これを解明してはじめて、彼がなにを言っているのかわかったという箇所がかなりあり、そうした箇所は、当時この講演を直に聴いていた学生たちにもわからなかったはずである。

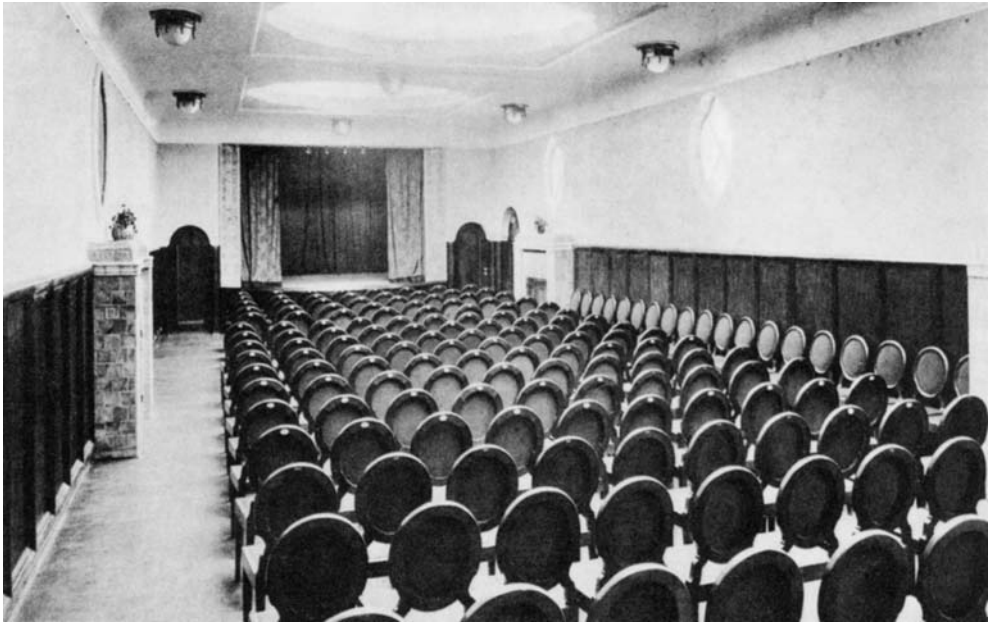
この点を顧慮して、『完全版』の「まえがき」に次のように書いた（前掲書：ii 頁）。

本書は、『職業としての学問』を理解するための情報源の《完全版》であり、読者が、訳文とともに要説・個別注解を読み、そこに記されている典拠に直に当たって追検証をおこない、また研究編によってヴェーバーの思想全体を把握するための書物である。この追検証作業を怠る者は、本書からなにも得ることができない。重要な典拠・論拠および考証の詳細は本書にのみ記しており、『圧縮版』には、考証によって得られた結論を記しているにすぎない。したがって、研究者・大学院生が学術書・学術論文・学会発表等において引用するさいには、『圧縮版』ではなく、かならず本書（《完全版》）を典拠としなくてはならない。

この講演録のなかには、ただたんに字面をなぞって読む（＝「虚心坦懐」に読む）だけだと、どんなにドイツ語に堪能な人でも、ほとんど例外なく誤読に陥ってしまう箇所がそこここ——大量に——存在する。しかもその箇所の多くは論旨理解上きわめて重要な箇所である。これらの箇所にかんしては、筆者自身、そこに書かれている記述と、ヘルムホルツ、トルストイ、ゲーテ、グンドルフらの論稿とを突きあわせ、その論稿のその論旨にたいして、ヴェーバーは同意しているのか批判しているのかを見極めることによって、ようやく十全な理解に到達できた。だから、『完全版』においては、当該箇所の記述が誰のどの論稿と関連を有しているのかを——ときにはかなり長々と引用しつつ——明示した。しかしそれでも、たとえばトルストイの『なにをなすべきか』は、『完全版』において引用した箇所のみならず、その全体を——なるべくドイツ語版（カール・リッター訳）に依拠して——読まないと、『職業としての学問』のなかでなかば暗示的に引き合いに出されているトルストイの立論と、それをヴェーバーがどう扱っているのかを十分理解できない。そこには、トルストイにたいするヴェーバーの同意と批判とが混在しているからである。

おそらく——というよりも現在すでにそうであるが——自称「研究者」が、典拠に直に当たることを怠ったまま（つまりヴェーバーとトルストイらとを突きあわせて追検証することを怠ったまま）拙著・拙訳を批判すると思われる。そこで、そうした不毛な末人的批判を斥け、

図1 シュタイニッケ書店付設ホール (Akademie Aktuell, 01-2014: 41)

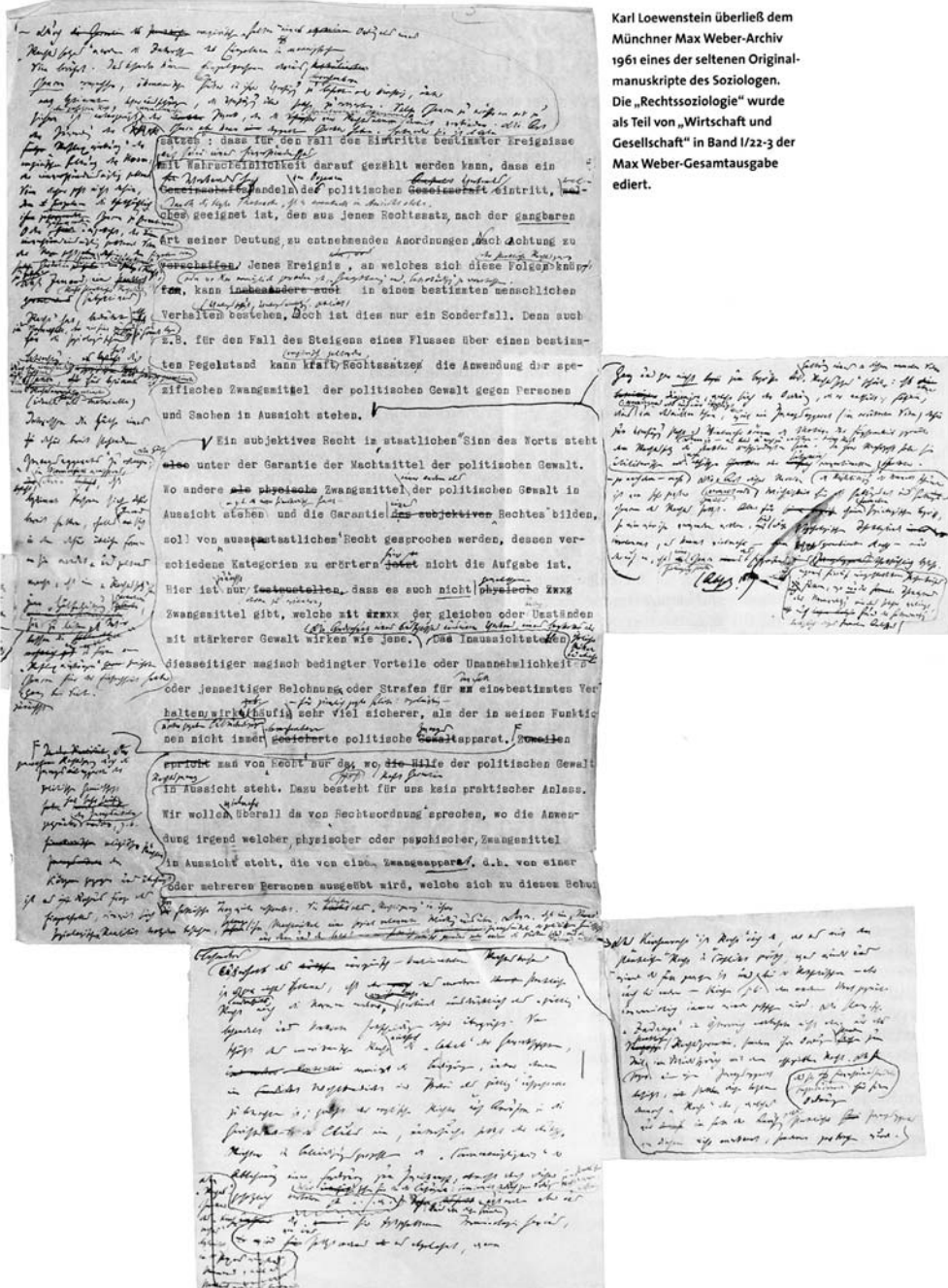


ゲオルク・C・シュタイニッケの回想によると、彼が書店の古い社屋の大規模な改修（あるいは建て替え）に着手したのは、1914年の第一次世界大戦勃発直前期である（野崎敏郎 2016: 425 頁）。このとき社屋内にこのホール（いわゆる Steinickesaal）が付設され、以後ここでさまざまな文化講演会が開催された。天井に二つ（か三つ）の大きな天窓があることから、ホールは社屋の最上階に位置していたことがわかる。書店跡地に掲げられているレリーフには「1914-1941」と刻まれており、1941年までこのホールが使用されていたようだ。

レーヴィットは、このホールの収容人数を「約 150 人」としている（Löwith 1988: 424）。この写真に写っている座席の数を数えてみると、前 5 列は一列 8 席（40 席）、6 列目から 16 列目までは一列 10 席（110 席）、右手壁面に横向きの席が 19 席みえており、その右端の席は暖炉の陰に半分隠れている。この暖炉の陰に完全に隠れている部分に、さらにもうひとつ席があるかどうかは判然としない。合計で 169～170 席なので、レーヴィットの記憶はおおむね正確である。あるいは、レーヴィットがここを訪れた 1919 年 1 月 27 日には、まだ壁面横向きの席が設置されていなかったと仮定すると、彼の記憶はきわめて正確である。

この日、民主党の集会に参加していたため、予定より遅れてやってきたヴェーバーは、きびきびと弾むような足取りで会場に入り（ebd.）、登壇する途中で、聴衆のなかにパーシー・ゴートハインの姿をみつけて会釈した（Löwith 1986/2007: 18, 野崎敏郎 2016: 341～342 頁）。つまりヴェーバーは、この写真の左手か背後にある聴衆用の出入口から入り、左側の通路を通るときパーシーに会釈し、前方左側の扉からいったん楽屋に入り、そこから登壇し、『職業としての学問』を語ったのである。時期からみて、ここにみえる三基の暖炉は稼働していたことであろう。

図 2 『経済と社会』草稿への加筆状況 (Akademie Aktuell, 01-2014: 54)



『経済と社会』のいわゆる「旧稿」の草稿のほとんどは、第二次世界大戦末期の混乱のなかで韜晦し、
 かりうじて、カール・レーヴェンシュタインに預けられていた草稿のみが遺されている。この草稿は、
 現在バイエルン州立図書館手稿室に寄託されており、閲覧可能である。

『職業としての学問』理解にかんして有益な相互裨益がなされるように誘う^{いざな}必要がある。

この講演録を理解するための必須条件として、さしあたり下記の諸点が挙げられよう。

- ①十九世紀後半から二十世紀初頭にかけてのドイツの大学問題を理解していること
- ②ドイツの大学問題にたいするヴェーバーの批判的論点を理解していること
- ③十九世紀後半から二十世紀初頭にかけての科学研究の諸問題を理解していること
- ④科学研究の現状にたいするヴェーバーの批判的論点を理解していること
- ⑤ヴェーバーが暗黙のうちに前提としている（トルストイらの）諸見解を把握していること
- ⑥1917～19年当時のヴェーバーの大学教育および学生たちにたいするスタンスを（当時の書簡等に依拠して）理解していること
- ⑦『職業としての学問』の講演実施および刊行事情について、第一次史料に依拠して把握していること

以上の条件を満たしつつ、つぎに、この講演録の読解にまつわる諸問題を吟味しよう。

Ⅱ 『職業としての学問』をどう読むか（1）講演録の特異性

『職業としての学問』読解の要点

この講演録の特殊な教育上の位置づけ・性格はすでに解明した（野崎敏郎 2016 : 394～395 頁）。第一に、十全な論述が意識的に回避され、むしろ聴衆（読者）自身に考えさせることが狙われている。また第二に、安直に《処方箋》を出すことが慎重に回避され、その末尾においても、なんら結論めいたものが与えられず、論旨が中断されて終えられている。そして第三に、この講演録は、ミュンヘン大学で学ぶ者たちにたいする副読本という位置づけを与えられている。そして、学問・科学・高等教育の根本問題の学修・理解は、この講演録だけで充足するものとはされていない。

不完全なレジュメかメモ書きに近い様相を呈しているこの講演録は、ただでいいに読んでいけば論旨を把握できるようには書かれていない。段落全体のまとまりを把握し、また段落間の繋がりを把握することはもちろんのこと、そこにおいて暗黙の前提とされている状況を理解し、明示されていない引用元を特定し、ヴェーバーが誰のどの立論と対論しているのかを突きとめ、簡略にすぎる記述の行間を読みとっていったときにはじめて論旨が浮かびあがってくる。そこで、この講演録を読むさいには、以下のようなさまざまな配慮が必要になる。

- ①語られている内容の暗黙の前提事項（ときとしてヴェーバーのまったく個人的な諸事情）をヴェーバーと共有しなくてはならない

- ②《わかったこと》とされている事柄を当時の聴衆（読者）と共有しなくてはならない
- ③当時の思潮や時代状況を確認しながら読まなくてはならない
- ④けっして「虚心坦懐」に読んでではない
- ⑤段落の論理を読みとらなくてはならない
- ⑥科学（者）を「外から」みている場合があることに留意しなくてはならない
- ⑦仮構・仮想のうえで論じている場合があることに留意しなくてはならない
- ⑧引用であることがしめされないまま引用されている文脈をみきわめなくてはならない
- ⑨論述の各局面における《立ち位置》や《視角》（の変化）を把握しなくてはならない

補足しておく、ヴェーバーは、たとえばルカーチの教授資格請求論文草稿を引き合いに出しているが（野崎敏郎 2016 : 267 頁）、それはあくまでも草稿であり、また教授資格請求は 1918 年に斥けられ、この論文はこのとき公刊されることがなかった。そのため、その内容は、当然当時の聴衆（読者）も知りえなかったものであり、これを引用していること自体、聴衆（読者）がこの講演録のみをもって十全な理解に到達することをヴェーバーが重視していない証左である。

また、この講演録のなかに、「虚心坦懐」（＝無前提）に読むこと（＝素人読み）が許容される箇所は一行たりとも存在しないのであって、どの箇所も、つねに入念な考証をおこない、それに依拠して読まなくてはならない——これは、この講演録にかぎらず、彼の全著作・全書簡を通じてそうであるが——。

さらに、段落が変わると、講演者（著者）の《立ち位置》や《視角》が変化している場合があり、なかには、ひとつの段落のなかでそうした変化がみられるケースがあるので、注意が必要である。

《立ち位置》確認の一例：段落④のなかの一節

この《立ち位置》や《視角》の問題とかかわって、筆者自身が読解に成功しなかった事例として、この講演録の末尾近くの文脈を取りあげよう。これは、本来は本稿のもっと後ろのほうに置くべき事例だが、本稿の完結までには一定の時間を必要とするという事情に鑑みて、先にこれを明示しておくことにする。

Wer dies Schicksal der Zeit nicht männlich ertragen kann, dem muß man sagen : Er kehre lieber, schweigend, ohne die übliche öffentliche Renegatenreklame, sondern schlicht und einfach, in die weit und erbarmend geöffneten Arme der alten Kirchen zurück. Sie machen es ihm ja nicht schwer. Irgendwie hat er dabei - das ist unvermeidlich - das „Opfer des Intellektes“ zu bringen, so oder so. Wir werden ihn darum

nicht schelten, wenn er es wirklich vermag.

これを、次のように訳した (野崎敏郎 2016 : 291 頁)。

当代のこの運命に男らしく耐えることができない者 [(たとえばトルストイ)], 彼にたいしては、例の公然たる背教者呼ばわり [=トルストイの場合はロシア正教会からのいわゆる「破門」] とはかかわりなく、むしろまったく単純素朴に、憐憫の情をもって大きく広げられた古教会の腕のなかへと、彼は黙したまま帰ろうとするのだと言わざるをえません。諸君が彼にたいしてそう言うのは、べつにむずかしいことはありません。そのさい、彼はなんとかして——これは避けられないことですが——「知性の犠牲」をもちださなくてはなりません、どっちみち。そのことでわれわれ [=現代人] は彼を非難しはしないでしょう。

『職業としての学問』の後半部は、長大なトルストイとの対論であり、当該箇所「彼」(＝当代のこの運命に男らしく耐えることができない者) がトルストイと直接関連づけられていることはまったく明かである。そして、トルストイのおこない (とりわけその悲劇的な最期) にたいするヴェーバーの高い価値査定に照らして、ヴェーバーがトルストイにたいして「古い信仰に立ちもどれ」と要求していると解するのは明らかにおかしい。トルストイは、その真摯な神秘主義的思考によって、実際に古い信仰へと立ちもどったのであり、されに、世俗的なものをすべてを放擲するというラディカルな行為によって、みずからの人生を首尾一貫したものとして完成させたからである。したがって、当該箇所の動詞 **kehre** (接続法第 I 式) は、要求話法ではなく間接話法だと解した。

ところが、その後、別の《立ち位置》と《視角》を立てることによって、当該箇所を別様に解することができることに気づいた。この「彼」(＝「当代のこの運命に男らしく耐えることができない者」) は、トルストイを指しているのではなく、仮構された存在のようである。つまり、当該箇所では、《ヴェーバー⇔トルストイ》という単純な二極対置がなされているのではなく、《ヴェーバー⇔仮構された存在⇔トルストイ》という三極対置だと思われる。トルストイのように、当代のこの運命に男らしく耐えることができない者が今日もなお (たとえば諸君のなかに) 存在すると仮定すると、その者にたいして、「それならトルストイを見習って、古い信仰へと立ちもどるべきだ。そうするのが筋ではないか」と要求しないわけにはいかない。そうすると、その者は、トルストイがそうしたように、どうしても「知性の犠牲」をもちださざるをえなくなるだろう——ここをこのように解すると、もっとも自然に筋が通る。この解釈なら、**kehre** (接続法第 I 式) を要求話法として解することができる。

したがって、当該箇所を次のように訳しなおすことにした。

当代のこの運命に男らしく耐えることができない者、彼にたいしては、〔トルストイに倣つて,〕例の公然たる背教者呼ばわり〔＝トルストイの場合はロシア正教会からのいわゆる「破門」〕とはかかわりなく、むしろまったく単純素朴に、憐憫の情をもって大きく広げられた古教会の腕のなかへと、~~彼は~~黙したまま帰らなさいと言わないわけにはいきません。諸君が彼にたいしてそう言うのは、べつにむずかしいことではありません。そのさい、彼はなんとかして——これは避けられないことですが——「知性の犠牲」をもちださざるをえません、どっちみち。そのことでわれわれ〔＝現代人〕は彼を非難しはしないでしょう。

またこの記述は、トルストイのきわめて高度な首尾一貫性（＝言行一致）を称賛するものだから⁽¹³⁾、この箇所すこしあとに出現する *Rechtschaffenheit* を、「知的公正」ではなく「知的誠実（性）」と解することにした。

ヴェーバーは、当該箇所において、トルストイの後半生の歩みを——とりわけその悲劇的な最期を——念頭に置き、それを、トルストイがみずからの行為をもつて知的誠実性を貫徹させたものとみて、神秘主義の模範としている。ヴェーバー自身はこのトルストイの道を選択しないのだが、それでもトルストイの行為にたいして最大級の賛辞を惜しまないのであり、この言動はヴェーバーの知的誠実性の証である。

(未完)

〔注〕

- (1) 従来、ラートゲンはヴェーバーの後任だと考えられていたが、そうではなく、経済学・財政学第一教授ポストを占めているヴェーバーの職位はそのまま、そこに第二教授ポストが新設され、この第二教授としてラートゲンが招聘された。またアルトホフは、ラートゲンの意向を汲んで、彼がハイデルベルク大学に招聘されるようバーデン政府に圧力をかけておきながら、その後、まさにそのラートゲン招聘を潰しにかかるという挙に出ていた。この人事の数奇な経緯についてはすでに考証を終え、完全に解明した（野崎敏郎 2011: 126～167, 172～175 頁）。
- (2) ヴェーバーは、『ロッシャーとクニース』のなかで、ラウとクニースの「前任者」と誤記している（WL 6: 2）。この記述が誤っていることはすでに指摘した（野崎敏郎 2011: 345～346 頁）。1897 年に、ヴェーバーは、ラウとクニースが「相前後して（*nach einander*）」ハイデルベルク大学の国民経済学を代表したと書いており（Pfaff 1897: 116）、この表現が正しい。
- (3) 従来ひどく誤認されていたが、ヴェーバーは、1903 年にハイデルベルク大学を退職しなかった。また 1918 年夏学期にヴィーン大学の教壇に立っていたとき、彼は一時的にハイデルベルク大学を休職しており、秋になるとハイデルベルク大学正嘱託教授に復帰した。彼がこの大学を退職したのは、1919 年春にミュンヘン大学に赴任するときである。したがって、彼と、ヴィンデルバント（1903～15 年在職）およびリッケルト（1916 年着任）とはハイデルベルク大学哲学部における同僚である。こうした事実関係についてはすでに詳細に究明した（野崎敏郎 2011）。
- (4) この点が見過ごされてきたのは、主としてマリアンネ・ヴェーバーによる伝記の悪影響である。彼女は、たとえばアルンスペルガーについて、その文部官僚としての才知・狡知を見抜くことができず、彼を、たんに夫に便宜を図ってくれる親切な老人とのみみなしている（野崎敏郎 2011: 349～350 頁）。こうした彼女の迷妄に引きずられて、従来は、ヴェーバーとバーデン政府との関係は

良好だったかのように誤認されてきたのである。

- (5) 教育哲学者ツィーグラーは、1884年にシュトラースブルク大学で教授資格を取得し、1886年から1911年までこの大学で教鞭を執った。一方ヴェーバーは、1883/84年冬学期と1884年夏学期に、シュトラースブルクで兵役に就くとともに、この大学で学んでいるが、このときツィーグラーとヴェーバーとのあいだに接触があったかどうかは確認できなかった。ツィーグラーは、1907年9月にシュトラースブルクで開催された第1回ドイツ大学教員会議の呼びかけ人のひとりであり、ヴェーバーは、第2～4回のこの会議に参加しているから、この頃両者間になんらかの接触があったことが推測される。

ツィーグラーは、1899年に大著『十九世紀の精神的社会的諸潮流』を公刊し、これはヴェーバーにも大きな影響を与えた。本稿で用いているのは、1911年に『十九世紀ドイツの精神的社会的諸潮流』と改題された版であるが、1916年に、『十九～二十世紀ドイツの精神的社会的諸潮流』と再改題された版(著者生前の最終版)が刊行されている。

- (6) ヴェーバーは、アルトホフから直接聞いた話として、次の言を紹介している。「ミクヴェル〔財務大臣〕のところに行くとするば、これからはつねに拳銃を携帯するつもりだ。そうでないと、大学が必要とする資金を奴から全然分捕ることが〔でき〕ない」(Dreijmanis 2010/12: 126)。
- (7) こうした論点についてはすでに立ちいって論及した(野崎敏郎 2011: 317～320頁)。
- (8) たとえば『支配の社会学』におけるベッカー参照をみよ(MWGI/22-4: 392, 430 f.)。
- (9) ハンブルクを去るにあたって、ベッカーは、1913年8月6日付で市長ヴェルナー・フォン・メッレに宛てて長文書簡を書き、そのなかで、みづからを「大学理念の開拓者(ein Vorkämpfer der Universitätsidee)」と規定し、その自負をもって改革に取りくむ旨を語っている(StAH 361-6 I 5 (7): 9 f.)。ベッカーは、この理念の具現化のためにハンブルクを見限ったのである。
- (10) 保守固陋をもって知られるプロイセン文部省が、なぜベッカーのような急進的な大学改革論者を招聘したのかを解明することは興味深い論題である。筆者は、この招聘事情にかかわる資料をいくつか発見したので、折をみて論及するつもりである。
- (11) なかでは、——いちいち著作名を挙げないが——上山安敏・潮木守一・早島瑛らの仕事が先駆的なものとして重要である。
- (12) マリアンネの記述のなかでとくに問題のある箇所と、安藤の陥った錯誤のうちとくに重大なものについては、すでに指摘し、それがどういう性質の誤謬なのかも解明した(野崎敏郎 2011: 37～39, 78～81, 97～98, 121, 126, 148～149, 158, 172～175, 204, 205～206, 222～223, 228～229, 257～258, 303～304, 349～350, 351, 359, 362, 363, 377, 382～384頁)。また、今後われわれがマリアンネの記述をどのように扱うべきかについても明示した(前掲書: 326～328頁)。
- (13) よく知られているように、ヴェーバーは、思想と社会的営為との合致を求めた。そして福音主義の帰結としては「トルストイの首尾一貫性」しかなく、そのトルストイが、死に臨んでその「首尾一貫した結論」を確保することができたと評し、その営為を称えている(MWGI/15: 97 f.)。

[未公刊史料]

GLA 235/3140: Ministerium des Kultus und Unterrichts. Universität Heidelberg. Dienst. Die Lehrkanzel der Staatswirtschaft, Finanz- und Polizeiwissenschaft, und die Besetzung der Bestellung. Nationalökonomie. 1821-1930. Teil 1. Generallandesarchiv Karlsruhe

StAH 361-6 I 5 (7): 361-6. Hochschulwesen. Dozenten- u. Personalakten I 5. Oberschulbehörde, Sektion für die Wissenschaftlichen Anstalten. Personalakten des Professors Dr. Carl Heinrich Becker (1908-1933). Heft 7. Staatsarchiv Hamburg

〔文献〕

- Dreijmanis, J. (Hrsg.) 2010/12: *Max Webers vollständige Schriften zu wissenschaftlichen und politischen Berufen*, 2. Aufl. Bremen: Europäischer Hochschul-Verlag. 上山安敏・三吉敏博・西村稔訳 1979『ウェーバーの大学論』木鐸社
- Engelhardt, W. F. v. u. H. Decker-Hauff (Hrsg.) 1963: *Quellen zur Gründungsgeschichte der Naturwissenschaftlichen Fakultät in Tübingen 1859-1863*. Tübingen: J. C. B. Mohr (Paul Siebeck)
- Löwith, K. 1986/2007: *Mein Leben in Deutschland vor und nach 1933; Ein Bericht*, Neuausgabe. Stuttgart: J. B. Metzler. 秋間実訳 1990『ナチズムと私の生活——仙台からの告発——』法政大学出版局
- Löwith, K. 1988: Max Webers Stellung zur Wissenschaft. *Sämtliche Schriften, Bd. 5. Hegel und die Aufhebung der Philosophie im 19. Jahrhundert – Max Weber*. Stuttgart: J. B. Metzler
- MWGI/4: *Max Weber Gesamtausgabe, Abt. I, Bd. 4. Landarbeiterfrage, Nationalstaat und Volkswirtschaftspolitik; Schriften und Reden 1892-1899*. Tübingen: J. C. B. Mohr (Paul Siebeck), 1993. 田中真晴訳 2000『国民国家と経済政策』未來社
- MWGI/15: *Max Weber Gesamtausgabe, Abt. I, Bd. 15. Zur Politik im Weltkrieg. Schriften und Reden, 1914-1918*. Tübingen: J. C. B. Mohr (Paul Siebeck), 1984. 山田高生訳 1982『二つの律法のはざま』『政治論集 (1)』みすず書房
- MWGI/17: *Max Weber Gesamtausgabe, Abt. I, Bd. 17. Wissenschaft als Beruf 1917/1919 – Politik als Beruf 1919*. Tübingen: J. C. B. Mohr (Paul Siebeck), 1992. 西島芳二訳 1959『職業としての政治』角川書店
- MWGI/22-4: *Max Weber Gesamtausgabe, Abt. I, Bd. 22, Wirtschaft und Gesellschaft. Teilband 4, Herrschaft*. Tübingen: J. C. B. Mohr (Paul Siebeck), 2005. 世良晃志郎訳 1960/62『支配の社会学 (I・II)』創文社
- MWzG: König, R. u. J. Winckelmann (Hrsg.), *Max Weber zum Gedächtnis; Materialien und Dokumente zur Bewertung von Werk und Persönlichkeit*. Köln u. Opladen: Westdeutscher Verlag, 1963. ホーニヒスハイム (P) [大林信治訳] 1972『マックス・ウェーバーの思い出』みすず書房
- Pfaff, K. 1897: *Heidelberg und Umgebung*. Heidelberg: J. Hörning
- WL 6: Weber, Max, *Gesammelte Aufsätze zur Wissenschaftslehre*, 6. erneut durchgesehene Auflage, herausgegeben von J. Winckelmann. Tübingen: J. C. B. Mohr (Paul Siebeck), 1985. 松井秀親訳 1988『ロッシヤーとクニース』未來社
- Ziegler, Th. 1911: *Die geistigen und sozialen Strömungen Deutschlands im neunzehnten Jahrhundert*, ungekürzte Volksausgabe. Berlin: G. Bondi. 伊藤吉之助・飯田忠純訳 1933『現代独逸の精神的社会的潮流』第一書房
- 野崎敏郎 2011『大学人ヴェーバーの軌跡——闘う社会学者——』晃洋書房
- 野崎敏郎 2016『ヴェーバー『職業としての学問』の研究 (完全版)』晃洋書房
- 早島瑛 1987『ヴェーバーのボン大学招聘交渉とケルン商科大学昇格問題——大学の社会史によせて——』河上倫逸編『ドイツ近代の意識と社会——法学的・文学的ゲルマニスティクのアンビヴァレンツ——』ミネルヴァ書房
- 別府昭郎 1975 a「哲学部の歴史的変容——テュービンゲン大学の理学部の設置をめぐる——」日本教育学会『教育学研究』42(1)
- 別府昭郎 1975 b「十九世紀ドイツ大学哲学部における研究教育体制の変容」『歴史評論』301
- 別府昭郎 1977「ミュンヘン大学における国家経済学部の形成過程」『明治大学人文科学研究所紀要』15

〔付記〕

本稿は、平成 27～29 年度科学研究費（基盤研究（C））による研究成果の一部である。

（のざき としろう 公共政策学科）

2016 年 5 月 2 日受理